# 大江健三郎とテクノロジー：科学・技術・文学


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/46379 |

# 大江健三郎とテクノロジー
## ――科学・技術・文学――

團野光晴

### 1　はじめに

大江健三郎の文学と思想を、科学及び科学技術＝テクノロジーとの関わりで本格的に論じた批評は、管見の及ぶ限りでは見当たらない。しかし周知のごとく戦後日本は技術立国を目ざし、高度経済成長期を経て農業国から工業国へと大きな変貌を遂げたのである。その過程で人々の生活にもテクノロジーが浸透し、日本人の暮らしは伝統を失って急速に近代化していった。同時に人々の思考も、科学及びテクノロジーによる規定を大きく受けるようになったと言える。そのような時代から生まれた日本戦後文学が、科学及びテクノロジーの影響を受けていないわけはなく、その検討はそれ自体大きな研究テーマとなり得るはずである。大江健三郎の文章にも、よく見れば科学及びテクノロジーに関する記述が散見される。それらを繋いでいくと、大江という文学者の成立に、科学及びテクノロジーが相当大きな要因として働いていることが見えてくるように思われるのである。

ところでそもそも科学とは一般的にどう定義されるか。現在広く出回っていると見られる国語辞典『新明解国語辞典　第六版』（二〇〇五年二月、三省堂刊。以下『新明解』と略記）は、「科学」を「一定の対象を独自の目的・方法で体系的に研究する学問。雑然たる知識の集成ではなく、同じ条件を満足する幾つかの例から帰納した普遍妥当な知識の積み重ねから成る。〔広義では社会科学・人文科学を含み、狭義では自然科学を指す〕」とする。同書では「自然科学」を「自然現象を一定の方法で研究して一般的法則を見出そうとする科学。〔狭義では数学・物理学・天文学・化学・生物学・地学などを指し、広義では農学・医学および工学などを含む〕」とし、対義語として「文化科学」を挙げる。また「社会科学」を「文化科学の中で、特に、社会学・政治学・法学・経済学の称」、さらに「マルクス主義の立場による経済学など」、「人文科学」を「文化科学の中で、特に、哲学・言語学・文芸学・歴史学の称」と定義する。

大江の作家としての出発期において、科学はどう定義されていた

か。それをうかがわせるものとして、大江が芥川賞を受賞した前月に当たる一九五八年六月に出版された中谷宇吉郎『科学の方法』（岩波新書）がある。これはその第一章「科学の限界」で、「科学というものは、あることをいう場合に、それがほんとうか、ほんとうでないかということをいう学問である」と述べ、「ほんとう」とは「いろいろな人が同じことを調べてみて、それがいつでも同じ結果になる」「（人間が）感覚を通じて自然界を見ることによって、ある知識を得る。その得た知識と、ほかの人がその人の感覚を通じて得た知識との間に、互いに矛盾がない」という「再現可能の原則」が当てはまる事象としている。「再現可能」とは「必要な場合に、必要な手段をとったならば、再びそれを出現させることができるという確信が得られること」ともされ、例えば幽霊はこの原則に反するので、多くの目撃談があったとしても「科学の対象にはならない」、すなわち科学的真実ではないとされる。

『新明解』『科学の方法』ともに、「再現可能の原則」に則り現象を法則化して認識する営みとして科学を定義している。この科学を応用した対象への働きかけの手段が、科学技術すなわちテクノロジーということになろう。近年では、カオス・複雑系研究の出現などにより、「再現可能の原則」に則って事象を把握し操作しようとする物理学を範とした従来の科学のリアリティーが揺らいでいることも指摘されるが、[1] 基本的には以上のような科学及びテクノロジーの定義が今日でも有効であることは、『科学の方法』が現在も出版され続けている（二〇一〇年一二月で六四刷）ことからもわかる。より詳細には、科学及びテクノロジーの具体的実態とその変遷との相関において、大江文学を見るべきであろう。しかしそれは今後の課題として、とりあえずこのように科学及びテクノロジーを原理的に定義し、大江におけるその意義をたどることで、大江文学に新たな光を当ててみたい。

## 2　科学の視点からの初期大江同時代評
### ――白樺派・教養主義と関連して――

さて文壇デビュー当時、大江は科学の観点からはどのような作家と目されていたのか。これを考える場合注目されるのが、久野収・鶴見俊輔共著『現代日本の思想』（一九五六年一一月、岩波書店刊）、及び久野収・鶴見俊輔・藤田省三共著のシンポジウム記録『戦後日本の思想』（一九五九年五月、中央公論社刊）[2] である。両書は大江が文壇デビューした一九五七年に前後して発表され、『現代日本の思想』では白樺派に、『戦後日本の思想』では白樺派の後身で戦後に雑誌『心』に拠って活動した『心』グループに、それぞれ一章が割かれる。そこでは、白樺派＝『心』グループの思想的意義について科学の観点から議論が展開され、これを踏まえる形で、『戦後日本の思想』の最終章「戦争体験の思想的意味　知識人と大衆」で藤田省三が「大江健三郎の場合、サルトルから学んでいても、考え方は「心」のような日本型古典主義です」と発言している。これは、白樺派＝『心』グループを評価基準にデビュー当時の大江を科学の観点から位置づける同時代評として注目される。当時久野、鶴見、藤田は雑誌『思想の科学』同人であった（藤田は後に脱退）。[3]

この議論を詳しく追うと、まず『現代日本の思想』は第一章「日本の観念論―白樺派―」で、雑誌『不二』『大調和』『心』を通して「今日も、運動としてのまとまりをもちつづけている」「日本の観念論の代表」として白樺派を取り上げる。ここでは「観念論というのは、精神的（あるいは観念的）なものを重大なものと考え、それがもとになって世界がなりたっているという思想」である。そして「白樺派の人々は、宇宙の意志が、人間の幸福を計（ママ）ってくれるという信仰をも」ち、「宇宙の意志と自分の意志との調和を、実感によって知る」のであり、「この実感が認識方法の根本になっている点こそは、日本に土着の観念論としての、白樺派の特色である」とされる。この場合の「調和」とは、「宇宙の意志」に「自分の意志」をあわせることで「安心立命の実感」を得ることである。

反面白樺派は、「社会が何を必要としているかを考え、そこからわりだして自己の倫理的義務をわりだすという仕方」を、大逆事件などのために初めから「意識的にはいじょ」し、専ら「自我実現を人生の目標」として「心の欲するままに、いいだけ道徳的休日をとりながら、自分の足なみで」「芸術あるいは芸術の研究」という「自分の仕事」に邁進した、とされる。それゆえ彼らは「制度が人間をつくる仕方を見てとることができない。したがって、人間各個のもつ実感なるものが、いかに現在までの制度によって条件づけられたものかを割引して評価することができない」。この故に「実感をよりどころとするということは、自分の皮膚の下にまで入りこんでしまった旧社会の習慣に結局はよりかかって、判断の基準とすることとなってしまう」のであり、彼らは「実感という固定観念にひきずられ、この観念を〔実感の〕外側から批判する方法をもたなかった」とされる。

この認識の枠組みを基本的に受け継ぐ形で久野収は、『戦後日本の思想』の第三章「日本の保守主義　『心』グループ」で「社会科学や法則化認識を軽視する思想＝教養主義」を『心』グループの特徴として挙げ、これを「一方では白樺派の芸術主義、他方では漱石門下及びその他の人格主義に集結している哲学主義」とし、「かつての科学者も「心」に加わると、みんな哲学者として発言する。こういう哲学主義と芸術主義を統一的にいいあらわせば、非政治的な思想＝教養主義の立場で、むしろ規範主義――芸術的、哲学的――といっていい。この規範主義は自然科学や社会科学の実証知、法則知を軽視して、教養知、解脱知、個性知を重んじる人物主義、主観主義となり、マルクス的法則科学、客観主義に強く反撥する」と述べる。そしてそれ故『心』グループからは「現実存在のダイナミックスを構造的に分析する社会科学の眼が欠けていますから、現実存在の中でなぜ規範や理想が〝疎外される〟かという、疎外の問題が正面に出て来ない」まま、やがて「現実と規範が、（中略）ベッタリ・イデアリズムみたいな形で一緒になるところがあ」り、「戦争中のこのグループの実証知を軽蔑した戦争判断のあまさもここから出てくる」とする。

『現代日本の思想』『戦後日本の思想』とも、観念・規範・理想・人格及びその具現化としての芸術・哲学を自らの実感に基づくものとして重視する白樺派＝『心』グループの教養主義（＝主観主義）が、社会を法則化された制度として捉え、その従属変数として自己を客

観視する科学的観点を軽視していたことを批判していると言える。この批判の裏には、久野の弁にもうかがわれる通り、敗戦からの反省があり、そのことによる社会と自己の科学的認識の銘記がある。『現代日本の思想』でも、「白樺派には「制度」という観念がかけていたのであり、これをぬきにして世界史を見る限り、人間相互の本来の善意と善意とがこんがらかって世界大戦が生じたとしか考えられず、自分たちの戦争責任を理解することもない」ということが述べられていた。

観念に基づいて世界が成り立つと考える故に規範と現実が一緒になり、主観と客観の区別がつかなくなって科学的自己認識・社会認識が不可能になる白樺派＝『心』グループの教養主義の典型として、『現代日本の思想』では志賀直哉、武者小路実篤らが、『戦後日本の思想』では津田左右吉らが挙げられている。しかし、そのような教養主義の強力さを、自身科学者であることで最もよく示す人物としては、『戦後日本の思想』で『心』グループの一員とされていた中谷宇吉郎を挙げるべきであろう。現在も版を重ねる先掲の科学啓蒙書『科学の方法』の著者であり、雪の研究で世界的に著名な物理学者である中谷は、夏目漱石門下の物理学者・寺田寅彦の弟子でもあり、師の寺田に倣って数多くの随筆や絵画をものした文人でもあった。「かつての科学者も「心」に加わると、みんな哲学者として発言する」という久野の弁には、多分に中谷のことが念頭に置かれていると思われる。

中谷の教養主義をよく示すものの一つに、随筆「簪（かんざし）を挿した蛇」（『文藝春秋』一九四六年一二月号）がある。ここで中谷は「科学が戦争の役に立つのは事実であるが、それは科学の本然の姿ではない。科学は自然と人間との純粋な交渉であって、本来平和的なものであるからである。そういう意味での科学は、自然に対する驚異の念と愛情の感じとから出発すると考えるのが妥当であろう」と述べる。そして、「自然に対する驚異の念と愛情」を子どもに育んで科学に導くためには、「子供たちに夢をもたせ」る「迷信や怪異譚」にも寛容になる「非科学的な教育」が必要で、簪を挿した蛇が城跡の山に出るという自分の故郷の言い伝えなども、その実践として「甚だ結構である」とする。この論理を敷衍して中谷は、少年時代に教師から聞いた「精密科学の立場から見れば、全くの荒唐無稽な空想」である「物質と勢力との一致」の話を引いた後、「物心一如というような、この荒唐な夢が余りにも明らかに実現され、その原理に従って現実に原子爆弾が出来たのである。簪をさした蛇と原子爆弾の原理とが仲よく組合わされていた幼年の日の夢を、今更のようになつかしく思い見る次第である」と述べる。その上で、「この頃今度の大戦争で科学はB29や原子爆弾やD・D・Tのような偉大なる発明を産んだというような記事をちょいちょい見受ける。しかし私は少くもそれほど馬鹿なことは言わないつもりである。原子爆弾は近代人類の希臘以来の物質の概念を変更した大発明であって、鳥の先生や除虫菊の親玉と比較すべきものではない」とするのである。

中谷においては、農学・医学・工学といった経済などの〈不純〉な社会的要素を多分に含む実学的科学の産物である飛行機や殺虫剤から、原爆は区別される。それは「近代人類の希臘以来の物質の概念を変更した」ところの「自然と人間との純粋な交渉であって、本

来平和的なもの」であり、「科学の本然の姿」を示す「大発明」として特権化されるのである。原爆こそ、人間と自然とをより高いレベルで「調和」させ、その意味での「平和」をもたらし、「人間の幸福を計ってくれる」ものであるという、社会性抜きの「純粋」に自然科学的な認識がここにある。「幼年の日の夢」が科学によって実現し「宇宙の意志と自分の意志との調和を、実感によって知る」という白樺派的幸福が、確かにここには存するだろう。しかしそのことは、一九五四年三月一日に起きた第五福竜丸事件に際し、中谷が同年四月八日付『毎日新聞』に発表した「知恵のない人々」という文章で、「死の灰」を分析して発表した日本の科学者の行為をソ連への機密漏洩と非難し、被害者には金を出せば文句も出なかったはずだという旨の発言をして、「国民あげての憤激をかった」ことに通じてくる。[1] そこには、核の悲惨という客観的な社会的事実よりも「科学の本然の姿」という「夢」を優先する思想があり、まさにこれは久野が言う「社会科学や法則化認識を軽視する思想＝教養主義」からの自然科学観の真骨頂である。ここでは、科学が自己の客観視のためには使われず、専ら自己正当化の手段として使われてしまうことになる。

このような白樺派＝『心』グループの教養主義的主客混同批判の延長で、「大江健三郎の場合、サルトルから学んでいても、考え方は「心」のような日本型古典主義です」という藤田の批判がなされるのである。これは直接には、初期大江作品に見られる、戦争体験を有する戦中派と戦争体験を持たない戦後派の自己との断絶意識を、「真の理解者は、本人の自覚しない点をすら、引き出すことができる、ということを理解しようとしない」という「体験の独占性」への固執として批判する文脈から導き出されている。このことからも、個の体験と他の体験との間に法則を見いだすことで客観的に人間と社会を認識し変革するものとしての科学（社会科学）の軽視という白樺派＝『心』グループ的特徴を有する作家として、藤田が大江を理解していることがわかる。ただ、同じ主観への固執といっても、白樺派のそれが科学軽視の現れであるのに対し、大江のそれは科学に対する劣等感と疎外感の現れであり、そこに戦後的な特徴が存すると思われる。次にそのことを大江テクストからたどってみる。

## 3　戦後科学への絶望
### ――初期大江文学――

大江の講演「力としての想像力」（『図書』一九七三年一一月号）は、科学をめぐる大江の特異な体験と、そこからの独特の見解を語ったものとして目を引く。大江はここで、まだ少年であった敗戦直後の一九四五年秋から冬にかけ、「日本は戦争になぜ負けたのか」という質問に「科学的でなかったからです」と答えるよう、教師に殴られながら強要されたことを証言している。そして「事ほどさように、この一時代においては科学的でなかったから戦争に負けた、その日本が再生するためには、まず科学的でなければならぬということがナショナル・コンセンサスであった。そこで一般的な子供である私自身も科学者になることを願ったのです。そして自分の資質がそれに不適当であると認めねばならなかったことが、私にとっては大きい心理的な傷になりました」と述べ、併せて「科学の威力の裏側に

ある」「人間的悲惨」を反省することなく「経済的発展期を過ごしてきた」戦後日本の「科学第一主義」を指摘している。

このような戦後の「科学第一主義」のそもそもの発端は、廣重徹『戦後日本の科学運動』（一九六〇年一〇月、中央公論社刊）が指摘する、「一九四五年八月十五日、敗戦の詔勅にひきつづいて放送された」鈴木貫太郎首相の「日本は科学戦に敗れた、こんごは科学と文化の再建につとめねばならない」という談話であると言える。廣重は、この鈴木談話を手始めとして「文化国家としての再生ということが合い言葉のようにひろがった。だれでも、科学文化の建設とそれをとおしての世界文化への寄与を口にした。こういう主張さえすれば、軍国主義をくいあらためた民主主義者として通用するというわけであった。新聞・雑誌・ラジオを通じて科学者がさかんに書いたり、しゃべったりしたことの盛んなことは、まさに未曾有のことであった」と、科学をめぐる敗戦直後の状況について証言している。この状況を後に分析したのが、『思想の科学』同人であった都留重人の「科学と政治」（『思想』一九五二年四月号）である。都留は、敗戦後の日本の「科学への期待」には「日本は科学なきために敗れた、という反省」、「今後の日本は科学の振興なくしてはやってゆけぬ、ということ」、「科学的精神が不十分であったために無用の戦争を始めることになってしまった、という反省」、「原子爆弾の出現に関連し」て「科学者自身としても、自らが創りあげた手段が、どのように利用されるかということについて無関心ではありえない、という認識」が「戦勝国であるアメリカやイギリスの側」にも芽生えたこと、の四つの要素があることを指摘する。この内第一・二は平和路線において〈技術立国日本〉を建設する科学技術＝応用科学への期待、第三・四は適切な社会情勢判断と政治行動を導き〈民主主義〉を実現する社会科学への期待につながるものと言える。ここから、戦後においてまず求められた科学が、実学的な科学技術＝テクノロジーだったことがわかる。このようなテクノロジー礼賛としての戦後の「科学第一主義」においては、子どもの夢を叶えるようなやや浮世離れしたものとして科学を捉える中谷の教養主義的科学観は、現実にはマイナーな位置に押しやられていたというべきである。中谷が「簪を挿した蛇」で「科学精神を涵養したり、幼いうちからものごとを科学的に考察する癖をつけたりする」ことばかりが科学教育ではないことを強調しているのも、そのことの裏返しであろう。中谷の科学観は、テクノロジーとしての戦後日本科学に対しては無力で、その分一見良心的な文人のファンタジーとして存在し、その意味で戦後社会においては久野・鶴見・藤田らが定義する白樺派＝『心』グループと位相を同じくするものと言える。

少年の大江が抱いた科学への憧憬と失望は、このような敗戦後の状況において「ナショナル・コンセンサス」となった「科学的でなければならぬ」という強迫観念に裏打ちされたものであり、且つまた大江における「子どもの夢」としての中谷的な教養主義的科学観が、戦後日本の科学によって挫折させられた体験でもあったと言える。それをうかがわせるのが「最初の詩」（『群像』一九六一年一〇月号）である。文壇デビュー四年目のこのエッセイで大江は、「最前衛の理論を頭におさめ」るのみならず「基本的な実験をつうじて具体的にものをつくりあげる科学者」を志望していた自分に、中学の

教師が「科学者だけにはなれないよ」と宣告して「ぼくを恥辱感と失望、怒りのうずまきのなかへつきおとし」、その時から「ぼくは孤独で暗く偏屈な少年にかわった」と述べる。そして中学生の頃「隣町で科学発明展というものがひらかれ、ぼくも連続式ネズミ取りという機械を出品した」が落選し、入選作品が「黒板と地図とを一本で指させる白黒ぬりわけのムチとか、竹の節ごとに半月形の切りこみをつけたウチワ差しとかだった」ので、「怒りとともに審査員たちを軽蔑した」ことを告白している。伊丹十三[5]によると、ここで言う「連続式ネズミ取り」とは、落とし穴の蓋の板の真ん中に餌を表と裏に付けたネズミ大の回転板を取り付けたものらしいが、このような「夢」のある個性的な作品よりも、実用に耐える社会性を備えた製品の方を高く評価するのが、テクノロジーとしての戦後の科学である。それは、個性よりも大衆性を尊ぶ民主主義を推進し、白樺派的上流階級を解体するとともに、簪を挿した蛇というフォークロアが息づく自然との神話的調和の中にあった伝統的な暮らしを非科学的と否定し、国土の画一的な近代化＝都市化を推し進め、少年の大江に「農村から脱出する意志をかため（「最初の詩」）」させたものであったと言える。

この大江の科学体験を念頭に置けば、初期の大江作品が、このような戦後「科学第一主義」の下、科学的・都会的であろうとしてなりきれない劣等感を抱き、社会や政治から疎外される鬱屈の中で、外界との神話的な調和の回復を夢見る者の孤独な心象を描いたものであったことが見えてくる。『東京大学新聞』一九五七年五月二二日号に掲載され荒正人・平野謙に認められた「奇妙な仕事」、及びこれに引き続く商業誌デビュー作「死者の奢り」[6]「他人の足」[7]は、いずれも病院を舞台とした作品である。その病院機構の中で、実習用の犬や死体といった実験室の中の自然物との「純粋な交渉」に耽溺したり（「奇妙な仕事」）「死者の奢り」）、「外部」から遮断された「海の近い高原にたてられた」療養所で専ら日光浴で日を過ごし自然と同化したり（「他人の足」）する主人公らの幸福な「監禁状態」（一九五八年三月文藝春秋刊の短編集『死者の奢り』の大江の後記）がみずみずしく描かれ、これが実学的科学としての医学が帯びる不純な政治性・社会性（大学病院機構の官僚的体質や療養所で隔離された者に対する社会的差別）によって打ち壊されることへの鬱屈が描かれる。これらの作品では、自己を疎外する政治性・社会性を帯びたテクノロジーが医学の姿を取ってわかりやすく具現化されているが、同じく「監禁状態」を描くその他の初期作品でも、戦争（「飼育」[8]や「芽むしり仔撃ち」[9]）や占領状態（「人間の羊」[10]）、学生運動組織（「偽証の時」[11]）などが、医学と同様に主人公を疎外する政治・社会性を帯びたテクノロジー機構として設定されている。「死者の奢り」で主人公の「僕」は、脱走を図って銃殺された兵士の死体との架空の対話で、戦争や政治に関われない者たちとして自分たち戦後世代を虚無的に捉えるのであるが、それは主客が幸福に合一していた戦前までの教養主義的観点からの、主客が無残に分裂した戦後状況の科学的認識なのである。このような認識の下、社会状況の前でうなだれて積極的に自己の外へ踏み出すことなく、失われた神話的な主客合一の夢を美しく歌い上げるリリシズムが「芽むしり仔撃ち」までの初期大江の本領であった。それを早く指摘したのが江藤淳だったと言える。江藤

は、新潮文庫『死者の奢り・飼育』の解説（一九五九年九月）で「死者の奢り」を「作者が兵士の屍骸に託している屈託した抒情、屍体処理のアルバイトが不可解な手ちがいから徒労におわるという背理にかくされた抒情は、かつてないすぐれた資質の出現を示していたのである」と評していた。これが藤田省三に言わせれば先述のように「大江健三郎の場合、サルトルから学んでいても、考え方は「心」のような日本型古典主義です」ということになるのだが、それがスタイルとして『心』グループと相似形をなしながらも、以上のようにその内実がテクノロジーとしての科学に対する軽視ではなく、それに受身に翻弄されるばかりだという劣等感・疎外感・絶望感であるところに、大江の特異な点が認められる。それは、テクノロジーに対する教養主義的科学の敗北という、戦後的事態の一帰結とも言えよう。

やがて大江は、このようなテクノロジーとしての戦後科学に抑圧された情念が、超科学的なナショナリズムによって正当化され噴出する様を迫力ある筆致で描き出す作品を繰り出していく。「セヴンティーン」（「文学界」一九六一年一月号）では、進学校の劣等生として焦燥と鬱屈を抱える疎外された「おれ」が、街頭で怒号する右翼団体党首の演説に自己の境遇を重ねて感激し、天皇に忠誠を誓う右翼少年となって、六〇年安保デモ隊を滅多打ちにし激しい昂揚と解放感を感じる。天皇への忠誠を誓うことによる全能感と恍惚というこの作品のモチーフが、同時期に発表された三島由紀夫の「憂国」（「小説中央公論」冬季号、一九六一年一月）と類似しており、三島が武者小路実篤・志賀直哉といった白樺派を代表する作家と同じ学習院出身者であるということは、一考に値しよう。テクノロジーに抑圧される主観的情念がナショナリズムによって正当化され解放されるというモチーフは、その後、障碍を持って生まれてきた我が子を見殺しにすることを断念し、情人と国外逃亡することをやめて、誇りと自信を得て日本の家庭に帰還し、外国人観光客から金をふんだくる通訳として生計を立てようと決心する主人公を描いた『個人的な体験』（一九六四年八月、新潮社刊）、また重藤文夫広島原爆病院長をはじめ「反体制の志」を以て原爆の脅威と戦う医師たちを「広島の正統的な人間」として「日本の新しいナショナリズムの積極的シンボル」とするなど革新ナショナリズムを基調とした『ヒロシマ・ノート』（一九六五年六月、岩波書店刊[12]）、さらに科学文明に疎外される谷間の村の人々の鬱屈が、アジテーター鷹四の工作によって谷間の一揆伝説を旗印とした排外的ナショナリズムに高まり、在日コリアンの経営するスーパー・マーケットを標的とした暴動として爆発する様が描かれる『万延元年のフットボール』（一九六七年九月、講談社刊[13]）などに結実する。これらは現在も大江の代表作であり続けている。

## 4　科学としての文学へ
## ――人間解放のテクノロジーとして――

しかしその後の大江は、「観念論」から脱して外界・他者との双方向的コミュニケーションへ自己を開き、自己変革を目指す人間を描こうとするようになる。そしてその方法として科学的認識と技術を

重視するようになるのである。その転換点となっているのは、やはり『万延元年のフットボール』である。ここでは、村人を扇動して暴動を起こす弟鷹四の〈革命〉に終始冷淡であった兄蜜三郎が、鷹四の死後、科学的実証によって鷹四から評価すべき点を見出し、そのことで「期待」の感覚を回復して新生活へ向け行動を起こす。また『万延元年』の拾遺集とも言うべき中短編集『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』（一九六九年四月、新潮社刊）所収の「父よ、あなたはどこへ行くのか？」[14]では、主人公の「肥った男」が、一方的な思い込みで知的障碍のある我が子と接していた自分を反省し、医師の指導に従って科学的かつ適切な対応を息子に取り、そのことで自らも病的な肥満から脱して健康を取り戻すまでが描かれるのである。

この作風の変化の背後に、孤独な観念に閉じこもるセンチメンタリズムを許さない障碍児との共生体験があることは、「父よ、あなたはどこへ行くのか？」からも明らかである。併せて『ヒロシマ・ノート』以後、自らの観念性を正当化するナショナリズムをアジアや沖縄の視点から大江が相対化されていくことも、これに関係していよう。すなわち、『ヒロシマ・ノート』執筆時のパートナーだった雑誌『世界』編集者・安江良介の後押しによる平岡敬の韓国人被爆者レポート[15]の発表や、「日本が沖縄に属する」及び「「本土」は実在しない」という認識を得る『沖縄ノート』（一九七〇年九月、岩波書店刊）[16]に結実する沖縄体験を経て、「敗戦経験と状況七一」（『世界』一九七一年一〇月号）で大江は「かつてぼくは、やはり広島で原爆をうけた青年の死にあたって自殺した、その恋人の少女について文章を書きつつ、新しいナショナリズムの花、という言葉をもちいたことがあった。しかしいま、ナショナリズムという言葉は、たとえそれに反語的意味あいをこめてすらも、すなわち言葉そのものを逆手にとるようにしてすらも、ぼくはそれを用いたくないと考えている」として、『ヒロシマ・ノート』における自らのナショナリズムをはっきり批判し、これに代わって「国家にたいしても、世界にたいしても、まったく独自の自由な足場から、主体的にアクティヴに対等の闘いをたたかう」という「人間」というビジョンを打ち出すのである。

この「人間」の立場が社会的意義を持つためには、自己と外界（他者・社会・自然）との「交渉」を、「純粋」という観念的・主観的な状態にとどめず、「再現可能の原則」に照らし合わせて客観的に捉える科学的な態度が必要である。その際、より多くの、そして常に新たな視点から、自他関係を絶えず問い直し、自他のよりよい「交渉」の方法を追求し続けることが、真に科学的な態度であり、そこから編み出される技術こそ、人間解放のテクノロジーということになろう。

このことを大江は評論集『状況へ』（一九七四年九月、岩波書店刊）[17]で「科学的な認識ということにつきつけていえば、想像力はそのうちにくいこんでいなければならぬし、想像力的な現実認識の展開は、つねに科学的な認識によって裏うちされつづけなければならない」、また「主体的に状況をとらえなおす。その行為の動力源となるものこそが、想像力にほかならない」（第一二章）と明瞭に語る。この「科学的な認識によって裏うちされ」た「想像力」こそ、科学をも常に問い直し続ける真の科学の動力源であり、「国家」や「世界」に対して「まったく独自の自由な足場」にありつづけようとする自立した「人

間」の立場を確立するものである。そしてそのような「人間」こそ「民主主義者」であることが、「白鯨のもっとも暴力的な、反人間的な滅茶な仮面のうしろからあらわれてくる筋道通ったものにむかいあう」ために白鯨を追い続けるエイハブ船長（メルビル『白鯨』の主人公）を「自立した人間」「天上なるものへの民主主義者（デモクラット）」「想像力の側の人間」と評することを通じて主張される（第七章）。『状況へ』は、この「人間」の立場からの現代科学文明批評であり、それは最終的に「学生運動あるいは大学改革の実践」や「科学的な追求の現場」など、「それこそあらゆる道が」「いったんその気になれば」「そこにつうじているところの、行きどまり」としての「神秘主義」への批判に収斂する（第一二章）。「科学のもたらす人間的悲惨とまったく無関係」に「科学の威力を示威するだけの存在」としての「ウルトラマン」（第四章）や「国家権力のリクエストにこたえてというより以上に、たとえばオートメ化された戦場という構想に熱中して」研究に邁進するエリート科学者集団「ジェイソン局」（第五章）、「絶対的なるもの」を「相対化する自立した人間とはどのような人間なのか」を突き詰めることがなかった「戦後状況」において残り続ける「絶対天皇制の幻」（第七章）、「科学」のもたらす悲惨に対して「忍受の精神」を強いる「絶対天皇制的なるもの」を背景とした「国益」という大義（第八章）など、『状況へ』で批判の対象となるものは、いずれもこの「神秘主義」のバリエーションである。

この「神秘主義」が纏うものが「科学的なイディオムによる眼くらましの言葉」（第二章）だと言える。そしてこれに対抗する「われわれが進んでその言葉を自分の言葉として採用し、この科学の時代を生き延び、それを改造しさえもしなければならぬ、そのような真の科学者の言葉」を発する者は、「その専門の分野で、つねに「これが人間であることとなんの関係があるか」と問いつつ」仕事をする「ユマニスト」としての科学者だと大江は述べる（第二章）。この「ユマニスト」は、「絶望しすぎず、むなしい希望に酔いすぎることもない」「実際的」な態度で困難に向き合った重藤博士ら広島の医師たちとして、既に『ヒロシマ・ノート』に登場していた。『状況へ』において、これをナショナリズムの媒介なしに語ることが出来た時、大江は戦後の「科学第一主義」に対する劣等感・疎外感を克服し、「科学的な認識によってうらうちされ」た「想像力」を文学の方法として、自ら科学技術を使いこなす立場に立ったのである。この自覚は先掲「力としての想像力」で、作家を「言葉の技術者」「想像力の技術者」と規定し、「科学が人間を殺すならば、文学は当然、科学にむけて、たとえ勝ち目のない戦いをであれ、その想像力の力においていどまねばならぬ」とする一方、「反・科学ヒステリー」を戒めるといった形で明確にされている。この立場から、現実を「明視」し人間を解放するテクノロジーとして文学を科学的に理論化したものが『小説の方法』（一九七八年五月、岩波書店刊）に他ならない。

## 5　結論・エンジニアとしての文学者

ここで大江が「言葉の技術者」「想像力の技術者」と言った場合の「技術者」が、単独の職人ではなく組織化されたエンジニアであることは、『小説の方法』において一層明らかである。その最終章「X

方法としての小説」には、次のような記述がある。

書き手は個の言葉を書きしるすのだが、まず、語、文章のレヴェルですでに備えている奥行き、構造によって、文学表現の言葉は、その個を超える表現を成就させるのである。しかも文学表現の言葉による作品として共通の場にいたりながら、その表現が、個の有機的な特質をうしなうというのではない。すでにあきらかにしてきたとおりに、それは想像力的なものを喚起する文学表現の言葉の仕掛け、いわゆるイメージのレヴェルから見ても同様である。その想像力的なものの、文学表現の言葉におけるあらわれに、神話学的、フォークロワ的な読みとりがかさねられる時、書き手の個は時間、空間にわたって多様な集団的想像力とむすびつく。コンピュータを装備した支配構造の言葉の砦にたいして、個の言葉ながら強靱に文学表現の言葉も戦略づけられているのである。

文学における「個」と「個」を超えたものの合一というここでのビジョンはまさに白樺派と相似形を成すのだが、それを実現するものが「実感」ではなく「神話学」という科学的知見であり、その形式が『暗夜行路』のような自然と個との融合ではなく「コンピュータを装備した支配構造」と対抗すべく戦略づけられた個のネットワークとされているところに、大江の戦後的特色が認められよう。無論このネットワークは個の解放のためのものであり、これを構築する方法として小説＝文学がイメージされているのである。職人としての芸術家たる白樺派に比しての、方法を普遍的なテクノロジーとして意識的に共有するエンジニアとしての文学者・大江の姿勢が鮮やかである。その文学的理念が果たして「観念論」でないかどうかは、今後個々の作品に当たって検証されるべきだろう。

注

(1) 黒崎政男「ゆらぐ科学のリアリティー」。『朝日新聞』二〇〇二年六月一九日夕刊。

(2) 初出は「戦後日本の思想の再検討」。『中央公論』一九五八年一～一二月号。

(3) 勁草書房版『戦後日本の思想』（一九六六年三月刊）の久野収「あとがき」による。なお本稿では二〇一〇年一月刊の岩波現代文庫版『戦後日本の思想』を参照した。

(4) 廣重徹『戦後日本の科学運動』（一九六〇年一〇月、中央公論社刊）。

(5) 伊丹十三「永久式ネズミトリ機」。『日本文学全集50　大江健三郎』（一九七一年七月、河出書房新社刊）「解説」。なおここでは「永久式ネズミトリ機」となっている。

(6)『文學界』一九五七年八月号。

(7)『新潮』一九五七年八月号。

(8)『文學界』一九五八年一月号。

(9)『群像』一九五八年六月号。

(10)『新潮』一九五八年二月号。

(11)『文學界』一九五七年一〇月号。

(12) 初出『世界』一九六三年一〇月、六四年一〇月～六五年三月号。

(13) 初出『群像』一九六七年一月～七月号。

(14) 前半「a裏」は原題「父よ、あなたはどこへ行くのか?」として『文學界』一九六八年一〇月号、後半「b表」は原題「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」として『新潮』一九六九年二月号に初出

(15) 平岡敬「韓国の原爆被災者を訪ねて」(『世界』一九六六年四月号)。なお平岡は「韓国人被爆者への眼差し」(『追悼集　安江良介　その人と思想』、一九九九年一月、「安江良介追悼集」刊行委員会編・発行に所収)で、中国新聞記者としてソウルを取材し、政治に見棄てられて苦しむ韓国人被爆者の実態ルポを連載したところ、岩波書店の雑誌『世界』の編集者だった安江の目にとまり、安江から「これは大事な問題だ。ぜひ『世界』に書いてくれませんか」と勧められ、「韓国の原爆被災者を訪ねて」を発表することになったと証言している。

(16) 初出『世界』一九六九年三月、八月、一〇月～七〇年一月、三月～六月号。

(17) 初出『世界』一九七三年二月～七四年一月号。